「地場産業レポート」

福岡県繊維産業の歴史と現状

竹 内 正 俊

福岡県の繊維工業は、平成6年度の工業統計によると事業所数137、従業員2,531人、製造出荷額332億円で、いずれも年々減少傾向にあり、県全体に占める割合も低位に属している。しかしながら、その製品の中には歴史的に独特な特徴を持ったものもあり、国内市場の一角を確保している。これらの繊維工業は、図1に示すとおり県中央部の福岡地区と県南部の筑後地区に多く分布しており、いずれも博多織、久留米絨といった伝統産業を抱えている。

福岡地区の繊維産業はなんといっても博多織である。博多は古くから大陸文化の移入玄関口として栄えてきた。嘉禎元年（1235年）、博多の満田弥三右衛門は承天寺開山の聖一國師とともに中国（当時の宋）に渡り、織物、朱焼、箔焼、そうめん、じゃこう丸などの製法を取得し帰国した。弥三右衛門はこれらの製法を人々に伝授したが、織物の技術だけは家伝とした。しかし、当時の織物における文様は宋の模倣にすぎず、苦心の末に仏具の「独鈷」及び「華皿」から考案された文様を織りだした。これが献上柄の元になった。当時は主として反物と着尺であったが、後に弥三右衛門の子孫が再び中国（当時の明）に渡り、広東で織物技法を研修し帰国後博多の竹若伊右衛門とともにさらに工夫改良を重ね、琥珀織りのように生地が厚く浮線紋や柳条などのある厚地の帯を作り出すことに成功した¹⁾。

慶長4年（1599）、黒田藩主、黒田長政が博多織を幕府に献上したことから「献上博多」の名が起った。博多織を献上品に指定した藩は、献上の風格と粗製乱造を防ぐため、織屋株を持つ12戸の織元に生産を限定しその保護育成を図った。

この織屋株は明治維新まで続き、維新後はこの制限が解かれて自由に織れる競争の時代に入り、博多織業界は

図1 福岡県の繊維産地概略図

再興期に入った。その後、西南戦争が勃発すると軍人軍属が博多を去来して戦争景気を表し急速に発展したため、粗悪品の防止と模造品の防止を目的に博多織会社を設立した。

日清戦争前後までの博多織の生産は男帯が大部分を占めていたが、明治18年頃ジャガード機、ドビー機が博多織にも使用されると、流行の変遷が速やかで鮮麗華美な、しかも男帯の数倍もする女帯へと移行していった。

その後幾多の変遷を経て、昭和51年に博多織が伝統的工芸品に指定されるが、着物離れの進行と共に生産量は減少し昭和50年の194万本をピーク時に昭和59年には100万本を割り、平成6年には39万本まで低下している。組合員数も昭和52年に170社近くあったものが平成6年には88社へと半減し、従業者数も昭和50年のピーク時の3,732人が平成6年の679人と18.2%まで減少している。

History and Existing Condition of Fukuoka Textile Industry

著者紹介 MASATOSHI TAKEUCHI

Fukuoka Industrial Technology Center

福岡県工業技術センター 化学繊維研究所繊維技術課 課長

本稿では、福岡県繊維産業を概観していただいた。

しかし、業界の新技术、新製品開発への意欲は少しも衰えを見せてはいない。この間、博多織デザインシステム、画像処理システム等の技術開発や、ドレス、インテリア、ギフト商品等の商品開発に取り組み成果を上げており、今なおタペストリー、綴帳等の製品開発や、エキスパートシステムによるカラー写真織技術の開発等に積極的に取り組んでいる。

一方、久留米市、筑後市、八女郡広川町を中心とした筑後地区には久留米絣、タオル、綿・スフ織物といった多くの種類の織物が生産されている。

久留米絣は、1788年久留米に生まれた井上伝の創始によるものである。幼少より木綿織りの稽古を始めた伝が12、3歳のころ、着古した着物に白い斑点があるのを不思議に思いこれをヒントに白糸を括って絣糸を作り、これと黒糸を交互に織ったところ紺地に白い絣の入った織物ができた。この珍しい織物を「加寿利」と名付けたのが絣の始まりといわれている。この絣は、霰織り、霜降織と呼ばれ当時の人気を博した。そして伝が15歳のころにはすでに「お伝絣」の名が藩内に広がり、数名の弟子を抱え、さらに40歳の頃には400余名の婦女子が指導を受けて、機業としての絣織りはついに久留米を中心とする南筑後地方に、確固たる基礎を築くこととなった²⁾。

このように、久留米絣は伝により発明されるが、近くに住む田中久重（からくり儀石衛門、東芝創立者）は常に相談相手となり、織り方や機械に色々と創意工夫を加え、絣の発明とその完成に助力を惜しまなかったことも見逃せない。

また、絣そのものは幾度洗濯をしても退色せず、庶民の常用衣料としては長く使用に耐える好適な織物であるので、これが需要を高くする要因ともなった。

その後、工程の工夫改良や機械の開発・導入によって量産化が可能になり昭和の初期200万反を生産するが、昭和18年戦時下の民需用綿織物の生産禁止により命脈をたたれる寸前にあった。しかし、業界がこの技術保存を政府に強力に請願して綿糸の消費割り当てを受け、製作技術の優秀な11人を選んで、社団法人日本美術及び工芸技術統制協会のもとで技術の保存に努めた。

昭和26年、綿糸統制が撤廃されると生産は再び急増し、昭和30年から36年にかけて110万反を生産するまで復興した。この間、昭和31年には国の需要無形文化財に指定された。しかし、その後は洋装化に伴い年々減少を続け昭和51年伝統工芸品に指定されるが、高齢化や後継者不足により、平成6年には20万反まで減少している。

しかしながら、備後、伊予と並び三大絣といわれた久留米絣のみが今なお綿絣の正統を維持し産地を形成しているのは、先人達の技術の保持と製品開発への弛まぬ努

力の賜である。この精神は脈々と受け継がれ、現在においてもブラウスやワンピースなどの商品開発或いは絣の広幅化、自動括り機の開発、括りのデザインシステム開発等生き残りをかけた挑戦を続けている。

タオルは、明治32年甘木において石橋松太郎が先晒し浴巾タオルを始め、大正3年に、久留米市の田中定吉が足踏み織機を改良した田中式タオル織機を完成させた。それが比較的良く次々に参加者が増え、大正6年頃には久留米絣の不況にあえいでいた絣業者が数多く転業し、一時は140名まで増加した³⁾。

それまで副業的なものにすぎなかったタオル製造は一躍脚光を浴び盛業をきわめた。この頃足踏み織機は暫時力織機に変わり生産内容も一変した。

大正8年頃の好況によって急激な発展をした当地の業者は無統制のうちに操業を続けたため、競争激化、品質低下を招き極度な経営不振に陥った。

そこで、昭和9年久留米同業組合を結成し、直ちに日本タオル工業組合に加入し自主統制を行った。その後順調な発展をみたが、昭和19年の戦力増強整備によって20工場から7工場に減少し、織機台数も397台から199台に縮小され終戦を迎えた。

戦後の発展は必ずしも順調ではないが、昭和42年に15工場、昭和52年に22工場と増加したのち、倒産、廃業により平成元年には17企業へと減少している。

本県のタオル製品は、浴巾タオルが98%とそのほとんどを占め、他にバスタオル、おしほりを生産している。浴巾タオルは、名入りの捺染タオル（オボロタオル）を特色としている。

タオル業界は国際化の影響を最も受けた業界の一つである。県内のタオル業界においても、原糸の高騰、中国等からの輸入品の増加といった構造的な問題は、企業努力の限界をはるかに超えている。

しかし、タオル業界においても一部ではあるが、ほつれ防止タオル、抗菌タオル、草木染めタオル等によるエコロジー商品や産業用への用途開発を試みており、その成果が待たれるところである。

綿・スフ織物業界は従来筑後地方の小幅織物であった久留米縞や久留米絣から、工業用資材織物の下請け生産を中心とする生地グループと久留米綿入れはんてんを代表商品とする先染めグループへと転換しそれぞれ産地を形成した。

生地はシューズ用厚地織物等地元大手ゴム会社の下請けの他に、シーツ・布団カバー・スモック・エプロン等も製造している。いち早く革新織機を導入し増産に勤めるが、昭和48年に7,376万㎡を生産したのをピークに年々減少し、最近では輸入品の増大で革新織機をフル稼働

するまでの仕事は無くなってきている。

一方、先染め織物業者の一部では、戦中・戦後の主力商品であったもんぺ等作業用衣服の需要不振をカバーするため、昭和40年頃から綿入れはんてんの製造販売に力を入れてきた。しかし、宣伝不足と他産業と比較して素朴なイメージが高度成長期の華やかな雰囲気と高級化指向の消費者意識になじまなかったこともあって、40年代後半までは伸び悩んでいた⁴⁾。

昭和48年末の石油危機以降は、省エネルギーや手作りのブームに乗って、久留米綿入れはんてんの市場は急速に拡大していった。昭和60年には288万枚を生産し、総売上に占めるはんてんの比率が93%に達した。また、その全国シェアも90%前後まで達した。その後、暖冬や競合製品の台頭で大幅な減産を強いられ、エプロン、スモック、ゆかた、作無衣等のポストはんてん製品の製造に力を入れ、はんてんの比率は58.2%まで低下した。

だが、はんてんそのものの需要が極度に落ち込んでいくわけではなく、普段着としてはんてんと共にファッション性を帯びた若者向けの製品やアウトドアとしての新市場の開拓に努力している。

以上、福岡県の繊維工業を概観してきたが、いずれも

時代の潮流として減産を強いられる中で、新技術の導入や新製品の開発に懸命な努力を続けている。しかしながら伝統産業である博多織、久留米絣が固有技術を持続しながら改良工夫を重ね、今尚新技術の導入や新製品の開発に取り組んでいるのに比べ、タオル、生地・先染といった業界は革新織機の導入などハードによる増産を指向してきたため、独自技術の蓄積に乏しく、製品展開も競合市場への参入でしかなく、思うように進んでいないのが現状である。現在、福岡県工業技術センターとしても、県内繊維産業の活性化に向けた研究開発指針を策定中であり、産学官が一体となった業界支援体制の構築が急がれているところである。

文 献

- 1) 750年の伝統博多織を探究して；畑野与惣次，(1983)。
- 2) 久留米絣；久留米絣技術保存会，(1969)。
- 3) 筑後市タオル産地診断報告書；福岡県中小企業総合指導書 (1977)。
- 4) 久留米地域地場産業の現状と課題；(財)久留米地域地場産業振興センター，(1989)。

日本学術会議木材研究連絡シンポジウム 大学改革の現状と課題—木材学の立場から—

主 催：日本学術会議木材学研究連絡委員会
共 催：繊維学会ほか
日 時：5月25日(土) 14:30～17:30
会 場：京都大学木質科学研究所木質ホール（宇治市五ヶ庄）
（JR 奈良線黄檗駅下車徒歩8分）
問い合わせ先：木材学研究連絡委員会
連絡委員（幹事）滝 欽二
静岡大学農学部
静岡市大谷836
電話 054-238-4860
FAX 054-237-3028, 3031

繊維製品品質管理士試験

出願受付：平成8年5月10日～20日
試験日：平成8年7月21日(日)（結果発表 9月上旬）
試験場：日本女子大学・相山女学園大学
武庫川女子大学・労済会館（金沢）
手数料：受験料(A)12,360円（初受験）
受験料(B)9,270円（1部合格・免除科目あり）
免除判定申請料6,180円（申請者のみ）
登録料10,300円（全科目合格者のみ）
問い合わせ先：(社)日本衣料管理協会
〒105 東京都港区芝公園2-11-13-205
電話 03-3437-6416
FAX 03-3437-3194